

## 社会運動と研究会の昭和初期

### 読書による組織化と組織化された読書

#### Social Movement and Study Group in the Showa Period

#### Organization through Reading and Organized Reading

○ 新藤 雄介

Yusuke SHINDO

福島大学行政政策学類 Faculty of Administration and Social Sciences, Fukushima University

**要旨**…本研究は、『戦旗』と『新興教育』を、昭和初期の社会運動との関わりの中で捉え、運動を推進するための読者の組織化に焦点を当て分析した。その際に、特に研究会といった読者による会が、運動の中でどのように位置づけられていたのかに、着目して捉えた。

**キーワード** 研究会 労働運動 農民運動 プロレタリアート 読書会

#### 1. 問題の所在

本研究の目的は、昭和初期の社会運動の中で、読書と組織化がどのような関係にあったのかを明らかにすることである。ここでの運動とは、労働争議や小作争議へと発展するような、賃金労働者や農民といった層による労働運動と農民運動を意味している。そうした社会運動において重要な役割を果たしたのが、社会主義・マルクス主義の思想であり、その出版物であった。

しかしながら、こうした社会主義・マルクス主義の出版物を、労働者や農民が社会運動の中で受容する様子は二重の排除によって見えにくくなっている。それは、①社会主義・マルクス主義の出版物が発禁などの取り締まりを受け、その受容は公の場からは排除され秘匿される傾向にあったこと、②大正末の福本和夫と山川均による論争や、昭和における講座派と労農派による「日本資本主義論争」のように、高度に理論的なものが焦点化されてしまい、労働者や農民が求めた平易な思想や出版物が低級なものとして排除される傾向にあったこと、である。

そこで本研究では、労働者や農民といった一般の人々が、どのように社会主義・マルクス主義の知識を受容したのかということについて、その一端を明らかにすることを目的としている。特に、昭和初期の社会運動と研究会を通して、そのことを見て行く。

#### 2. 先行研究と本研究の方法

『戦旗』に関する研究は、①プロレタリア文学との関わりで作家論・作品論・組織論として分析されたもの、②芸術大衆化論争に焦点を当て分析されたもの、③読者論の観点から分析されたものがある。

①では、作家論としては、小林多喜二を取り上げたもの<sup>1</sup>、作品論としては、小林多喜二や中野重治の作品に作用した彼ら自身のイデオロギーをリアリズムとの関係から読み解いた島木圭太<sup>2</sup>などがあり、組織論としては、芸術大衆化論争

<sup>1</sup>尾西康光 (2013) 『小林多喜二の思想と文学——貧困・格差・ファシズムの時代に生きて』大月書店。ノーマ・フィールド (2009) 『小林多喜二——21世紀にどう読むか』岩波新書、など。

<sup>2</sup>島木圭太 (2013) 『リアリズムと身体——プロレタリア文学運動におけるイデオロギー』風間書房。その他に、神谷忠孝・北条常久・島村輝編 (2006) 『「文学」としての小林多喜二』至文堂、など。

との関わりで『戦旗』の創刊から廃刊までを活動方針とともに分析した栗原幸夫<sup>3</sup>などがある。②では、林淑美<sup>4</sup>などよって、各論者の立場と大衆観が明らかにされている。

③では、芸術大衆化論の系譜を大正期から追尾し、読者獲得のためにプロレタリア文学側が円本の大量生産と廉価販売の方針という商業主義的方法論を取り入れたことを指摘し、読者と大衆の関係を分析した前田愛<sup>5</sup>や、労働者の社会主義型読書やプロレタリア文学がサラリーマンに流行小説の一種として受容されたことを論じた永嶺重敏<sup>6</sup>の研究がある。

『新興教育』に関する研究としては、新興教育研究所について組織面とそこでの教育理論と教育実践を詳細に明らかにした柿沼肇<sup>7</sup>や、通史として新興教育研究所の運動全体を描いた『日本教育運動史』<sup>8</sup>がある。

以上のように、『戦旗』に関する研究について、①では文学に、②では論争に焦点があるため、社会運動と読者の関係を捉えることは行われなかった。③では読者へと視点が向けられるものの、社会運動との関係で捉えることはしていない。『新興教育』に関する研究では、組織との関係で社会運動には触れられるものの、読者や研究会については焦点化されなかった。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では前田や永嶺のように読者の視点を含みながら、さらに社会運動と関連させた視点を加え、『戦旗』と『新興教育』と捉えることとする。なぜならば、『戦旗』と『新興教育』は雑誌として運動を展開していくためにも、読者の組織化が必要とされ、さらにその運動は実際の労働運動や農民運動と密接に関わりを持ちながら展開されたからである。よって、本研究では、『戦旗』と『新興教育』を、昭和初期の社会運動との関わりの中で捉え、運動を推進するための読者の組織化に焦点を当て分析することとする。その際に、特に研究会といった読者による会が、運動の中でどのように位置づけられていたのかに、着目して捉える。

### 3. 『戦旗』における発禁と読者

1928（昭和3）年5月に創刊した『戦旗』は、日本プロレタリア芸術聯盟と前衛芸術家同盟が合流した「全日本無産者芸術聯盟」によって出版された。『戦旗』は、当時の労働運動・農民運動と深い関わりを持ち、小林多喜二の「一九三二年三月十五日」や「蟹工船」などの数々の重要なプロレタリア文学作品を生み出した。そのため、『戦旗』は司法・行政から警戒され、臨時増刊なども含め52号のうち30号で発禁処分を受けた<sup>9</sup>。特に、1930（昭和5）年以降は、31号中23号が発禁になるという高い頻度であった。

こうした発禁処分は、差押部数が多くなればなるほど、経済損失も大きくなる。『戦旗』は創刊号で7000部発行し、創刊年の1928年12月号では、8200部のうち958部で11.6%が差し押さえを受けている<sup>10</sup>。『戦旗』の差押部数が最も多かったのは、創刊3年目の1930年4月号で、2万2000部のうち1万6309部で74.1%が差し押さえとなっている<sup>11</sup>。つまり、『戦旗』は、常に発禁による損失の危険性を抱えつつ、発行した雑誌だった。それゆえ、差し押さえの損失を最小限にするための方法が、通常の流通経路を通さずに読者へと届ける「直接配布網」の構築＝読者の組織化であった。

創刊当初から読者の組織化については、一定程度進められていた。創刊号の巻末には「戦旗読者カード」が刷り込まれ、「諸君は進んで『戦旗』読者会に加盟し、果敢なる我等が闘争に参加せよ！！」<sup>12</sup>として、読者であることと、運動への参加が結び付けられていた。こうしたこともあり、1巻5号では、「全読者諸君に訴ふ」として告知が掲載され、

<sup>3</sup> 栗原幸夫（2004）『プロレタリア文学とその時代 増補新版』インパクト出版会。その他に、林淑美（1983）「コップの組織論と赤色労働組合主義論」『日本近代文学』30集、109-24頁、など。

<sup>4</sup> 林淑美（1976）「『芸術大衆化論争』論——日本のマルクス主義受容と文学（その一）」『武蔵大学人文学会雑誌』8巻1号、41-67頁。その他に、森山重雄（1965）「『芸術大衆化論争』」『文学』33号、48-58頁、など。

<sup>5</sup> 前田愛（1970）「昭和初期の読者意識——芸術大衆化論の周辺」『比較文化』16号、127-46頁

<sup>6</sup> 永嶺重敏（2001）『モダン都市の読書空間』日本エディタースクール出版部。

<sup>7</sup> 柿沼肇（1981）『新興教育運動の研究——1930年代のプロレタリア教育運動』ミネルヴァ書房。

<sup>8</sup> 黒滝チカラ・伊藤忠彦編『日本教育運動史2——昭和初期の教育運動』三一書房。

<sup>9</sup> 『出版警察報』1-40号、1928年10月-1932年1月。小田切秀夫・福岡井吉（1965）『昭和書籍／新聞／雑誌発禁年表 上』明治文庫、による。

<sup>10</sup> 「主要禁止出版物差押成績表」『出版警察報』4号、1929年1月、115-6頁。戦旗社戦旗少年戦旗編集部「メーデーと共に迎へる戦旗の二週年」『戦旗』3巻7号、1930年5月、62頁。

<sup>11</sup> 「主要禁止出版物差押成績表（昭和五年四月分）」『出版警察報』21号、1930年6月、126-7頁。この時期、直接配布の読者は7000名だったというから、『戦旗』が誌面で言及した発行部数と大体合致する。

<sup>12</sup> 「戦旗読者カード」『戦旗』1巻1号、1928年5月、ノンブルなし。

「(一) 諸君は、なるべく直接読者になつてくれることだ」、「(二) 一人は一人の読者を殖やせ」として、「『戦旗』の読者網を全国的に拡充せしめよ!」と訴えかけた<sup>13</sup>。しかし、「前号に於いて読者会の組織化について読者諸君の経験意見、批判を求めたがあまり活発な参加のなかつた事は遺憾である」<sup>14</sup>というように、まだ本格化してはなかつた。

#### 4. 『戦旗』と大衆化のゆくえ

『戦旗』が読者の組織化に本格的に乗り出すのは、1928(昭和3)年末になってからである。11月に、聯盟再組織案が決定され、以降『戦旗』は読者の組織化に本格的に乗り出す。『戦旗』にとって読者の組織化とは、①直接配布網による発禁対策、②末組織大衆の組織化という目的があった<sup>15</sup>。それゆえ、こうした読者の集りによる研究会などは、「読書会でも、芸術研究会でも名称などはどうでもよい。……かうした、小さな集りが、後に至つて、予期しない発展をとげるに至つた例の幾つかを、私は知つてゐる」<sup>16</sup>や、「全国の市町村等に於いてたとへ二三人でも読者のある所、必ず毎月二回以上読者会或ひは研究会を持つべきであらう」<sup>17</sup>として、読書はあくまで組織化のための手段として位置づけられた。

その後、『戦旗』は、1928(昭和3)年末には、支部及び支部準備会=15・読者会=23・その他(書店、組合、個人取り次ぎ等)=16、だったものが、1929(昭和4)年4月には、支局(東京)=23・支局(地方)=56・書店=20で計99、同年11月には、支局(東京)=86・支局(地方)=116で計202、1930(昭和5)年4月には、支局(東京)=94・支局(地方)=156で計250(+準備中=40)にまで増加している<sup>18</sup>。

大衆の組織化を目指す『戦旗』は、大衆に受け入れてもらえる雑誌を目指していく。そのために、「蔵原惟人氏の『誰にも判る経済学』はもう少し判り易くつまり小学校出の我々にも分る程に書いて欲しい」<sup>19</sup>というように、小学校卒業後の経歴の差が、組織化の壁となっていた。こうした読者の声に対して、『戦旗』編集部は、「六づかしい漢字や理解しにくい言葉を使はず」、「小学校も卒業してみない仲間のことをもつも念頭に置いて」<sup>20</sup>、記事を書く方針を立てる。

その結果、『戦旗』は労働運動・農民運動への関与が大きくなり、「『戦旗』を文学雑誌などと理解してゐる支局もあるらしいので一言します。『戦旗』は本質的に文芸雑誌ではない。大衆雑誌である」<sup>21</sup>との自己認識を示すに至るのであった。

しかし、こうした『戦旗』の読者の組織化と運動のための大衆雑誌化は、諸刃の剣となって二重の財政苦も招く結果となる。第一に、社会運動に近づく分だけ、発禁の可能性が高まり、経済損失が大きくなる。第二に、その対策として推進した直接配布網による読者の増加が、誌代未回収の増加を生み出すこととなった<sup>22</sup>。

#### 5. 『新興教育』における発禁と読者

『新興教育』は、教員の労働組合結成を目指して設立された日本教育労働者組合準備会から派生して生まれた新興教育研究所によって、1930(昭和5)年9月に創刊された。そのため『新興教育』もまた、しばしば発禁処分を受けた。

『新興教育』が全体として何号出版されたのかは不明確であるが、復刻版などから推定して合計21号だとすると、そのうち10号の47.6%が発禁処分を受けている。最初に処分を受けたのは、創刊2号目の1930年10月号で、発行3400部のうち838部の24.6%が差し押さえにあつている<sup>23</sup>。その他では、1930年12月号で発行2000部のうち462部の23.1%が、1931年8月号で発行1800部のうち459部の25.5%が、差し押さえにあつている<sup>24</sup>。

<sup>13</sup> 全日本無産社芸術聯盟機関誌部「全読者諸君に訴ふ」『戦旗』1巻5号、1928年9月、157頁。

<sup>14</sup> ナツブ出版部「全被圧迫民衆を戦旗の下に!」『戦旗』1巻7号、1928年11月、113頁。

<sup>15</sup> 戦旗社「戦旗支局は如何にして組織するか!」『戦旗』2巻2号、1929年2月、176頁。

<sup>16</sup> 山田清三郎「手近な二三の問題」『戦旗』2巻6号、1929年6月、105頁。

<sup>17</sup> 戦旗支局(鹿児島)「読者会を開け」『戦旗』2巻10号、1929年10月、81頁。

<sup>18</sup> 戦旗社戦旗少年戦旗編集部「メーデーと共に迎へる戦旗の二週年」『戦旗』3巻7号、1930年5月、62頁。

<sup>19</sup> 一読者「全国的編輯會議」『戦旗』2巻9号、1929年9月、187頁。

<sup>20</sup> 戦旗編輯局「文書の書き方について」『戦旗』2巻11号、1929年11月、65頁。

<sup>21</sup> 戦旗編輯局「編輯ノート」『戦旗』3巻2号、1930年2月、204頁。

<sup>22</sup> 「戦旗に発禁差押へ頻々として来る!」『戦旗』3巻6号、1930年4月、113-5頁。

<sup>23</sup> 「主要禁出版物差押調(昭和五年十一月分)」『出版警察報』28号、1931年1月、90頁。なお、記事では「1巻2号」と記載されているが、「1巻3号」の誤記の可能性がある。その場合は、「10月号」ではなく「11月号」である。

<sup>24</sup> 「主要禁止出版物差押調(昭和五年十二月分)」『出版警察報』29号、1931年2月、97頁。「主要禁止出版物差押調(昭

『新興教育』と『戦旗』は、「友誌」<sup>25</sup>という緊密な関係にあった。そのため、後発の『新興教育』は創刊当初から『戦旗』に倣い、読者の組織化と直接配布網による発禁対策を行っていた。創刊号では、「学校を中心に全国に直接読者網を張り！……発禁の場合に備えるためにも、ぜひ、直接読者になつて置いて貰いたい」<sup>26</sup>として告知している。

こうしたことから創刊半年後には、研究会の組織化の方法が掲載され、読書会・研究会の作り方として(1)新読者の獲得・(2)幹部の任務・(3)他団体との関係について、研究会の運営方法として(1)研究会のやり方、(2)教材の選び方、(3)支局の作り方について、入門文献などと併に示された。その内容は、「研究会の初歩としては、前に述べたやうに、まず座談会・茶話会・文学会などから始める。指導者はこれ等の会合において話題を巧妙に捉へマルクス主義的な理論の啓蒙にまで導いてゆくべきである。この場合、話題の中心は、文学論でも、宗教論でも、恋愛論でも其他政治・哲学・経済何んでも、差支へない」というものであった<sup>27</sup>。

記事の題名が示すように「研究会」と「読者会」が「・」で結びれており、研究会と読者会、さらには読書会は必ずしも明確に区分されていなかった。つまり、研究会そのものが読書の会であり、読書会そのものが文献を研究することであった。そして、これらの研究会・読書会も、読書はあくまで組織化のための手段として位置づけられていた。

## 6. 『新興教育』と大衆化のゆくえ

『新興教育』が『戦旗』と異なるのは、『新興教育』が、その読者を獲得し運動を広げていくための大衆化に対応しつつも、一方で教員という知識人階層の知的欲求も満たす途を探らねばならなかったことである。つまり、読者からは、「全体を通じてインテリ臭が甚だしい。俺達はテンデ分らんやうなむづかしいゴテゴテした言葉の論文ばかりぢやないか」<sup>28</sup>という平易さ(大衆化)を求める声と、「新興教育大衆化大いに結構——しかし、同誌の半分位は、よく選ばれた指導的論文を必要とします」<sup>29</sup>という理論的深さを求める声とが、読者の中で混在していた。

編集部としての方針は、「此の号、思ひ切つて、雑誌の大衆化をやつたつもりだが、まだまだ力が足りないので、充分に期待にそふやうなものが出来なかつたことは、全くイカンに至りだ。……だが、二月号からは、断然、面目を一新して、教育労働者の唯一の大衆雑誌に仕上げるであらうことを約束する」<sup>30</sup>として、大衆化の方向に進んでいた。そうした中、『新興教育』は、「本研究所は現実の教育労働者大衆の基本的運動に対してなんら独自の政治的組織指導を与ふるものでもなければ与へるものでもなく」として、「政治」とは切り離し「文化団体」として位置づけ、「合法性」を主張していく<sup>31</sup>。

『新興教育』が合法性を主張しなければならなかった理由の一端は、『戦旗』でも問題となった財政危機にある。発禁は確実に『新興教育』の経済的体力を奪い、その対策として『新興教育』は直接読者を増化させるための読者の組織化を図る。しかしこれは同時に、「雑誌の財政的危機は、いまや依然たる一部読者諸君の怠慢と、読者倍加・基金募集運動の不充分から、まさに廃刊の危機にまで切迫してある」<sup>32</sup>というように、未納誌代による財政悪化をさらに呼び込むことになった。

## 7. 読書による組織化と組織化された読書のゆくえ

新興教育運動関係の教員が埼玉県で検挙された際には、『雑木』という同人誌のネットワークが基盤となっていた<sup>33</sup>。この雑誌は政治的な運動の要素を含んだ内容ではなかったが、こうした研究会を行い雑誌を作る行為自体が運動として機能していた。そこでは、読書は組織化の手段として位置づけられていた。だからこそ、政治から切り離された文化的な活動が、翻って政治的な意味を宿していたのだといえる。

和六年八月分) 『出版警察報』37号、1931年10月、89頁。

<sup>25</sup> 「読め!! 俺達の友誌」 『新興教育』1巻2号、1930年10月、69頁。

<sup>26</sup> 「〔告知〕」 『新興教育』1巻1号、1930年9月、50頁。

<sup>27</sup> 山田三郎「読者会・研究会の作り方について」 『新興教育』2巻2号、1931年2月、69頁。

<sup>28</sup> 高田益男「赤いチョーク」 『新興教育』1巻2号、1930年10月、59頁。

<sup>29</sup> 吉岡一夫「赤いチョーク」 『新興教育』1巻4号、1930年12月、68頁。

<sup>30</sup> 「編輯後記」 『新興教育』2巻1号、1931年1月、73頁。

<sup>31</sup> 「研究所彙報 一九三一年度闘争のために臨時総会開かる」 『新興教育』2巻3号、1931年3月、65頁。

<sup>32</sup> 「雑誌『新興教育』を財政的理由による廃刊の危機より救へ！」 『新興教育』2巻5号、1931年5月、101頁。

<sup>33</sup> 「赤化教員続出に県学務部の大狼狽 今後は教員の身辺調べ」 『東京日日新聞 埼玉版(第二版)』1931年9月2日8面。